

日本近代化過程における牛乳・乳製品の受容

1. 序論

1.1 研究動機と目的

十八世紀後半以降、産業革命を経たヨーロッパ各国やアメリカは、アジアへの進出を開始した。日本もアメリカのペリーから開国を要求され、国内の体制変革を行い、大政奉還を経て、明治天皇を中心とする新しい政府を成立させた。明治元年（1868）正月には五箇条の誓文¹が發布され、開国和親の大方針が示され、この趣旨に沿って改革が行なわれた。版籍奉還・廃藩置県・徴兵令の実施などによって中央集権政治の確立につとめ、外に対しては国家の独立を保持し、経済の発展を図るために、安政の不平等条約の改正をめざした。

また、富国強兵をめざす新政府は、文化や国民生活の近代化を促進する必要から、率先して西洋の近代思想や生活様式を積極的にとりいれようとした。この風潮は明治初年の新しい世相ともなり、民間におけるジャーナリズムやその他を通して、啓蒙運動を促した。この傾向は庶民の生活様式にも一部受け入れられ、東京などの大都市を中心に広まった。当時この風潮は文明開化と呼ばれた。明治4年の散髪脱刀令、5年の学制發布、博覧会の開催、国立銀行の創設、太陽暦の施行、6年の地租改正などををはじめとして生活の洋風化となり、衣食住にも大きな影響を与え、近代化への道を促進することとなった。

こうして、文明開化期の日本人は新しい時代を迎えるため、西洋の制度、思想、生活様式などを受けなければならなくなった。その中に、庶民にとって最も関係がある部分は生活様式であろう。しかし、慣れてきたことを短時間に一変することは決して容易ではない。新しいことに慣れるまで必ず時間がかかるはずである。そして、衝突や融合が生じ、新旧のものが雑然混沌としていた。しかし、こんな混沌している状態を重ねていくうちに、時代の変化が次第に見えてくる。柳田国男は『明治大正史 世相編（上）』の中にこう語っている。

「時代が現世に接近するとともに、この問題の共同は弘くなりまたは濃厚になってくる。そうしてその関係の最も密かな部分に、国民としてのわれわれの生き方が、どう変化したかの問題があるのである。（中略）いかに平凡であろうとも衣食住は大事実である。各人の興味と関心はずでに集注し、また十分なる予備知識は行きわたっている。改めてこれを歴史として考えてみることは、社会のためであって同時にまた自分の入用である²。」つまり、モノがどう変化したのかは大事である。そして、歴史は最も当然であって、平凡な衣食住の裏に

¹ 慶応4年（1868）3月14日、明治天皇が宣布した明治新政の五箇条の基本政策。「一、広く会議を興し、万機公論に決すべし。一、上下心を一にして、盛に経綸を行ふべし。一、官武一途庶民に至る迄、各其志を遂げ、人心をして倦まざらしめん事を要す。一、旧来の陋習を破り、天地の公道に基くべし。一、智識を世界に求め、大に皇基を振起すべし。」

² 柳田国男『明治大正史 世相篇（上）』17～18頁。

あると考えられる。

そこで、本稿では、その中で、一番身近な「食」を取り上げ、近代化過程の中で、欧米食の移入に伴って、食生活がどのように変化していくかを検討したい。これが大きな研究動機である。

次に例として挙げてみたいのは牛乳である。孝徳天皇(在位645～654)の時代に、百済の帰化人福常が牛乳を天皇に献上した。江戸時代にも牛乳は薬用として一部の人には飲まれていたが、庶民には縁遠いものであった。明治に入ると、新政府は西洋を見習い、富国強兵を目指すため、牛乳の滋養を宣伝し、畜産も奨励した。だが、牛乳を飲んだら牛になると信じてきた当時の人々はやはり抵抗があった。また、牛乳の独特なおいには彼らにとって、決して「香り」とは言い難い。しかし、いつの間にか牛乳そのものに栄養という言葉や概念がつき、新しい価値が生まれ、人々に受け入れられるものとなった。そして、乳製品の普及によって、独特なおいも「香り」と感じられるようになった。最初はただの模倣であるにもかかわらず、徐々に定着していき、現代日本の食生活に不可欠な食べ物となってきた。近代化の過程の中で、牛乳の価値がどのように近代のパラダイムの影響を受け、生まれ変わってきたか、またその位置付けはどこにあるかを考察したい。これがより具体的な動機である。

本稿では日本近代化過程における食生活の変化を明らかにし、牛乳・乳製品の役割を考えていきたいと思う。

2.1 先行研究

日本近代化過程における制度や言語の変化に関する先行研究が多いが、生活史に関する論文が極めて少ない。特に近代の食生活の変化を論述する研究は翁璋麟の「日本食生活の変遷について—明治維新时期を中心として」³と安原美帆の「日本における食の近代化に関する研究：昭和戦前期の食事の内容分析を中心として」⁴しかない。そして、両方とも幅広く論述しているので、特定の食物に絞った研究ではない。一方、史料では、文明開化期の肉食に関する部分は詳しいが、牛乳・乳製品の受容に関する論述は殆どないと言える。

先行研究が制限されているからこそ、より一層の研究の必要性があるといえる。「食」は人間生活の基本であることは言うまでもない。バラエティーに富む食物を歴史学の視点から論理的に研究する意義は大きいと言える。

3.1 研究方法

研究方法としては、まず日本乳業史から日本における牛乳・乳製品の定着の実態を明らかにする。

³翁璋麟「日本食生活の変遷について—明治維新时期を中心として」台北、東呉大学日本研究所、1989。

⁴安原美帆「日本における食の近代化に関する研究：昭和戦前期の食事の内容分析を中心として」日本奈良女子大学、2004。

次に文献の論説、新聞の広告や記事、文学作品の中にある牛乳・乳製品に関する内容から、当時の日本人が牛乳・乳製品に対してどんな反応をしたであろうかを分析する。

最後に、二つの方法から得た情報を通じて、近代化過程における牛乳・乳製品の位置を考察したいと思う。